昭和レトロのモノづくり・軍手

ー全自動手袋編機の発明と普及ー

全自動手袋編機による軍手
左：最初の全自動手袋編機は指先の丸みをつくるカガリの作業を必要とした。
右：指先の丸みを編む全自動手袋編機による軍手、これにより大量生産が可能となった。

■軍手の歴史

日本で軍手が初登場したのは江戸時代末期。長州藩が鉄砲を素手で触って錆びないように兵士に手袋をさせたことが始まりとされ、下級武士が鉄砲隊の為に内職で手袋を縫ったと言われている。その後に徳川幕府が近代的な軍隊を創設したことによって手袋の需要が大幅に増大し、さらに明治には大日本帝国海軍が創設され一般的なものになった。

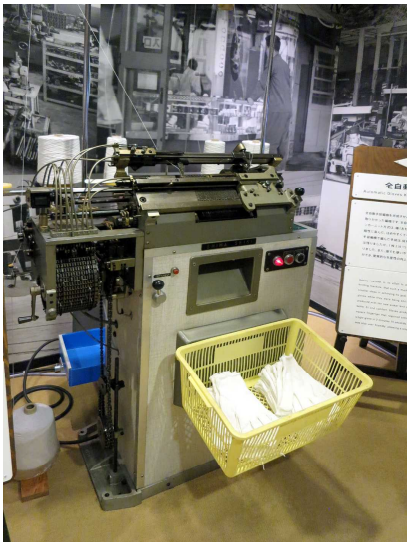
旧日本軍が用いたことによって当初は「軍用手袋」と呼ばれていたが、いつしか「軍手」と省略されて呼ばれるようになった。しかもその当時、軍手は主に防寒具として使用された。

初期の軍手は小型の横編機で指と手の平の部分を別々に編んで、あとで縫い合わせ作っており、手首にはゴムも入っておらず、色付けもない白一色であった。この製法は第二次世界大戦後まで続いたが、生産性が低く、非常に高価な物であった。

戦後、1950年代に石川式五指連続手袋編機という、指の部分を連続して編み上げる半自動編機が開発された。これよって生産性が倍増し、この時期を境に軍手の価格が暴落した。1960年には、作業時の安全性を向上させるために手首の部分にゴムを織り込んで編み上げる「ゴム入り安全手袋」が島精機（和歌山市）の島正博によって発明された。

■全自動手袋編機の出現

1964年には、島精機より写真の全自動手袋編機が開発され、縫い目の無いニットの手袋が量産可能になった。この編機は指先を四角に織り込む為、最終的に指先を丸める作業が必要であった。この部分を改良し最初から丸型に編み込む全自動編機を松谷製作所（安城市）が開発し、全自動化が実現した。島精機も独自の機構で全自動手袋編機（1970）を開発、製法を含め現在のモノと同様の軍手が完成し、現在の軍手へと受け継がれている。



1964 年に島精機が開発した全自動手袋編機（和歌山市、フュージョン・ミュージアム所蔵）、2017 年に機械遺産に認定された。　（2017/01/26 撮影）

現代の軍手製造工場・杉山商店株式会社（西尾市）　2017/02/10 撮影

実物展示中

■軍手の種類と用途

軍手は、糸の材質や形によって、各種のものが開発されている。

（1）綿軍手:綿100％の糸で編まれた軍手。純綿は熱に強く、高熱物に接した時、溶けることなく焦げるので火傷を防ぐ。

（2）化繊軍手:ポリエステル等の化繊、または綿との混合糸で編み上げた軍手で、最も安価。高熱にさらされると溶解するため、綿軍手に比べて熱に対する安全性は落ちるが、化学薬品へ耐性は勝る。

（3）再生軍手:衣料品から再生した綿糸を編み上げた軍手、性能は綿軍手に準ずる。元の衣料品の色がそのまま残っているため、様々な柄がつき、物によってはカラフルなものもあり、安価である。

（石田正治）